

本学における成績不振の理由に関するアンケート調査

井上能博*、池野聡一**、宇都宮郁***

Questionnaire research for poor performance of students at Showa Pharmaceutical University

Yoshihiro INOUE, Souichi IKENO and Iku UTSUNOMIYA

*;Associate Professor, Department of Developmental Education

**;Assistant Professor, Department of Developmental Education

***; Professor, Department of Developmental Education

要 旨

成績不振の理由を探るため、薬学演習試験を控えた6年生に日々の勉強についてアンケート調査を行った。平成27年度第1回薬学演習試験で正答率が60%に達しなかった学生と、超えた学生とで顕著に異なったのは、勉強する習慣の有無、助言を求める範囲そして勉強方法であった。この結果から考え得る対策を初年度教育に反映させることが望まれる。

キーワード

成績不振、勉強する習慣、孤独な戦い

I. はじめに (Introduction)

学生の学修をサポートする我々にとって最大の関心事は、成績不振の理由である。その理由の解明は、サポートを受ける学生にとって非常に大きな意味を持つ。多くの要因が関与し、さらに個人によって異なることも予想されるが、一部でも明らかにすることができれば、よりよい支援策を練ることが可能になる。

そこで、出身高校・入学試験の種類の違いなど学生の背景が大きく影響すると思われる低学年ではなく、本学のカリキュラム下で、長く学んできた6年生を対象に、薬学演習試験に向けての勉強時間や勉強方法、そしてわからない問題に遭遇したときの対処の仕方などをアンケートによって調べた。さらに一部の学生に対して行ったインタビューの結果をアンケート結果とともに解析し、成績不振に至る理由を考察した。

II. 方法 (Methods)

次の質問項目についてアンケート調査を行った。

対 象： 本学6年生(198名)(回収率：85.3%)

時 期： 平成27年12月および平成28年2月

質問項目：

- 1 薬学演習試験を意識して勉強を始めたのは(5 or 6)年生の?月からですか?

- 2 どのように勉強していましたか？（複数回答可）
 - a) 青本を繰り返し読んで
 - b) 教科書を繰り返し読んで
 - c) 既出問題集の問題を解いた
 - d) 過去問（卒試）を解いた
 - e) 過去問（国試）を解いた
 - f) まとめノートを作った
 - g) その他
- 3 何人で勉強することが多かった？
- 4 6年生の春、夏、秋に一日あたり何時間くらい勉強に充てていましたか？
- 5 わからない問題が出たとき、どうしていましたか？（複数回答可）
 - a) 友人に聞く
 - b) 担当教員に質問
 - c) ネットで調べる
 - d) 模範解答の暗記
 - e) その他
- 6 苦手な分野を下から選び、苦手な順に3つ挙げてください
 - a) 物理
 - b) 化学
 - c) 生物
 - d) 衛生
 - e) 薬理
 - f) 薬剤
 - g) 動態
 - h) 病態・薬物治療
 - i) 法規/制度/倫理
 - j) 実務
- 7 勉強に限らず、相談相手はいましたか？ それは誰ですか？
 - a) 友人
 - b) 親
 - c) 教員
 - d) その他

次の要領でインタビューを行った。

対 象： 本学6年生 60名（無作為抽出）

時 期： 平成28年1月～3月

方 法： 所要時間 約60分
インタビューアー 学修支援部門所属教員
1対1形式
質問項目

時間の使い方について、振り返ってみてどう感じていますか。

勉強方法を詳しく教えてもらえませんか。

どうなったら「理解した」と思えますか。

自分でがんばれたと思うことはどこですか。

後悔していることは何ですか。

解 析：

アンケート用紙には、学籍番号および氏名記入欄を設けた。これにより、第1回薬学演習試験結果および入学形式との関連づけが可能となる。さらに、第1回薬学演習試験の結果、合否を分ける目安となる正答率が60%以上のグループと、60%に達しなかったグループとに分けてアンケートを集計し、両者の比較において顕著に異なる結果となった項目から、成績不振の理由を検討した。

Ⅲ 結果と考察 (Results & Discussion)

1 各入学方式の薬学演習試験（第1回）得点率分布

アンケートをとる対象とした学生の状況を確認するため、薬学演習試験を入学方式別にまとめたものを図1に示した。本学の入学方式は5種類。センター入試の得点から判

定するA方式、本学独自の問題の得点から判定するB方式、センター入試の得点と本学独自の問題の得点から判定するC方式、基礎学力を問う推薦入試（2種類）である。苛酷な受験勉強を経ない推薦入試合格者に対し、学力を不安視する声がある。図1によると、得点率分布は、どの入試方式も1つのピークを持つ山形をしており、そのピーク的位置は得点率70～80%に収まっていた。各入学試験方式の集団の平均正答率を比較したところ、有意差を見いだすことはできなかった（t検定、 $p=0.05$ ）。低い得点率の方に山の裾野が伸びているB方式入学生のグラフが気になるが、入学者人数が多いため、山の高さが上がった分、裾野が広がったと考えることができる。このように、入学方式による学力の差を見いだすことはできなかったことから、受験勉強の有無や高校までの基礎学力の差は6年次の同期間における学力測定には影響を与えていないと考えられる。したがって、本学に入学してからの学習習慣・スタイルなどが学力の差を生んでいるのではないと思われる。その学習習慣・スタイルの差を調べるために、アンケート結果を薬学演習試験の得点率60%を境として、それ以上の得点率に達したグループと、至らなかったグループに分けて比較し、学習習慣・スタイルの違いを見出すこととした。

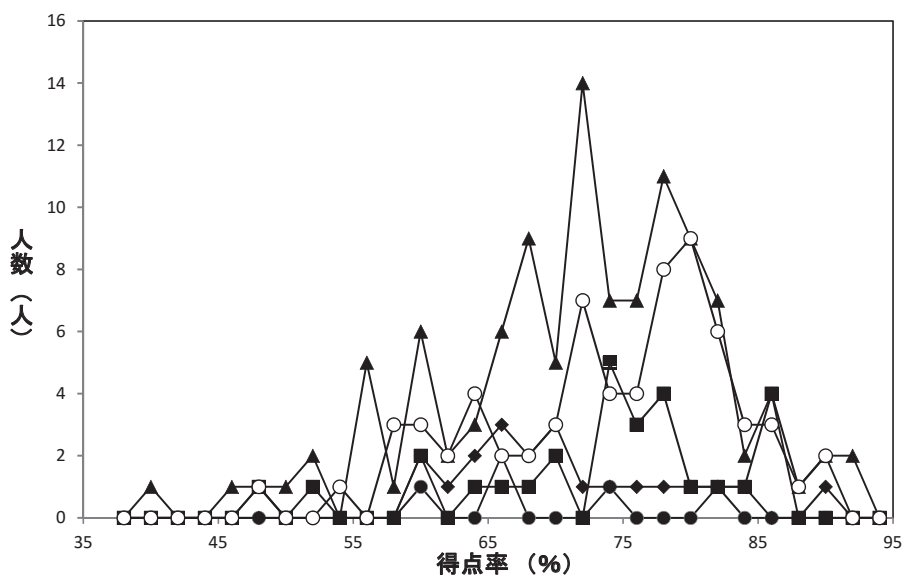


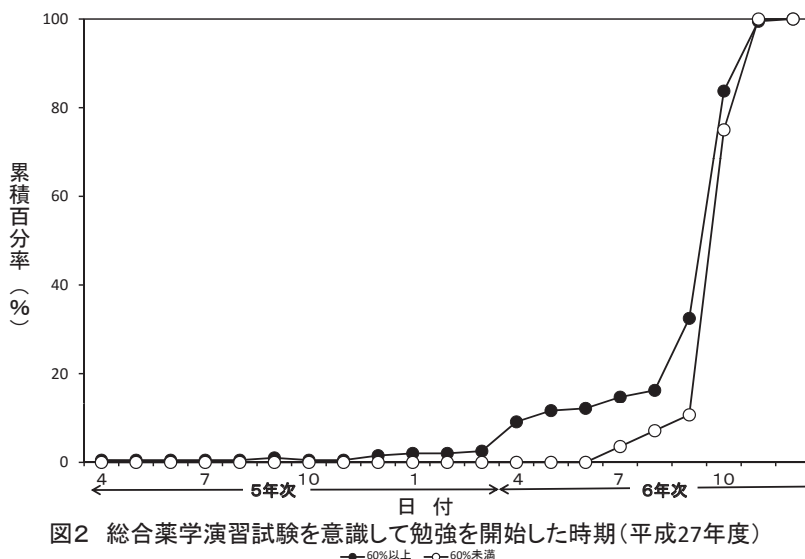
図1 各入学方式の総合薬学演習試験(平成27年度第1回)得点率分布

●A方式 ▲B方式 ■C方式 ◆公募推薦 ○指定校推薦

2 薬学演習試験を意識して勉強を開始した時期

2つのグループに分けるために用いた薬学演習試験に向けて、学生がいつから勉強を始めたかを図2に示した。60%以上の得点率を達成したグループには、5年次の4月から勉強を始めた学生や空いていたⅢ期の実務実習期間を利用して勉強を始めた学生もいたが、多くの学生が6年生になってから試験を意識したようである。すなわち、9.1%が6年次4月から勉強を開始し、夏休みに少し増え、卒業論文をまとめ終えた9、10月に32.5、83.8%と急激に増えていた。一方、60%未満のグループは、6年次の夏休みまでに勉強を始めた学生はほとんどいなかったが（4%未満）、9、10月で10.7、75.0%と急増していた。9月以降に勉強を開始する学生が急増する傾向は60%以上のグループと

同様であったが、その割合はいずれの時期においても60%以上のグループを下回っていた。



3 一日あたりの勉強時間

勉強時間についてもっと詳しく調べるために、一日あたりの勉強時間を季節ごとにたずねた(図3)。60%以上のグループでは6年次春の段階で、一日に3時間以上の勉強時間を確保している学生が46.2%、5時間以上では18.3%であった。60%未満のグループでは3時間以上確保している学生が37.9%いる一方、ゼロ時間が31.0%いた。これは普段勉強する習慣の有無を反映している。生活の中に勉強が組み込まれていないことは、いざ勉強を開始しようとしたときに多大なエネルギーを要することが容易に想像できる。

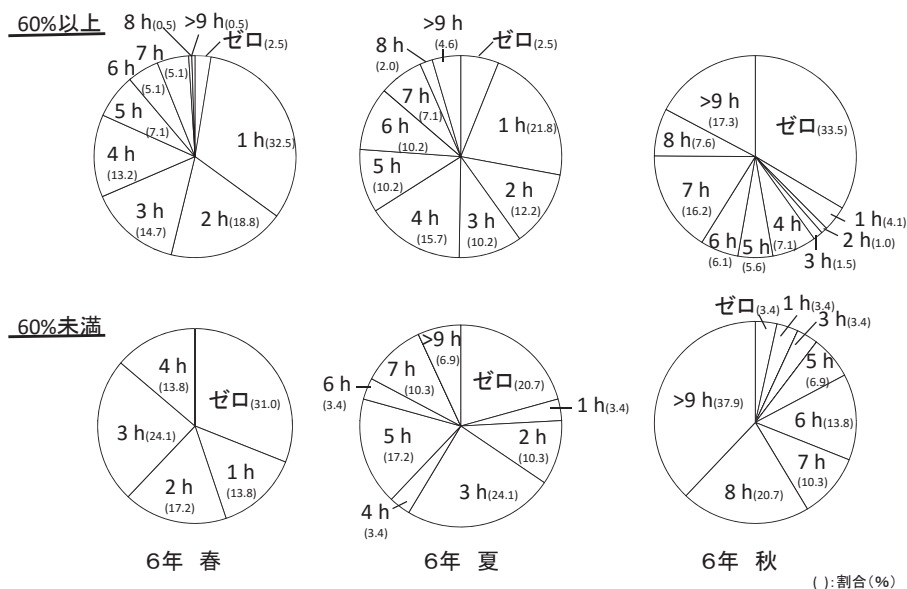


図3 一日あたりの勉強時間

春から夏へと時間が進むと、60%以上のグループでは、3時間以上確保している学生の割合が46.2%から60%へと増え、さらに試験直前の秋では微増の61.4%に達していた。一方、60%未満のグループでは、夏の時点でゼロ時間が20.7%もいた。春から夏にかけて3時間以上の勉強時間を確保できた学生の割合は37.9%から65.5%へと増え、さらに秋にかけて93.1%へと増え続けていた。

このことから、60%未満のグループは60%以上のグループよりも勉強に割いている時間が短かったことが分かる。そして、この短かった勉強時間は、60%以上のグループの伸びを上回り、急激に増加していった。春から夏、そして秋へと急激に勉強時間を延ばしていったのは、焦りが関与していたように想像できる。このことは、試験終了後に行った60%未満のグループへの面談において、焦りを感じていたと語る学生がいたことから裏付けられている。早くスタートをきることで、その後の負荷を減らし、焦らずに目標に向かえるメリットを享受できると思われる。そのために重要なのが勉強する習慣を持つことであろう。

4 勉強方法

勉強方法に関して、60%以上のグループと未満のグループとの間で大きな違いは、青本、教科書、過去問（薬学演習試験）の3点の扱い方であった（図4）。60%未満のグループは、青本を繰り返し読んで、過去の薬学演習試験の過去問を解く中で、教科書はほとんど使わないというスタイルであった。一方、60%以上のグループでは、教科書を青本と同じ程度参考にし、問題演習も過去問に偏らず既出問題集などをバランス良く利用していた。先の勉強時間のアンケート結果を考え合わせると、60%未満のグループは、確保した勉強時間が短いため、要点がまとめられた青本を使いながら目の前に迫った試験の過去問を解いていたと推測される。教科書を読まず、解説がついている既出問題集や国家試験の過去問ではなく、解説の乏しい薬学演習試験の過去問を解く行動から、丸暗記に近い勉強に終始していたのではないだろうか。時間のかかる理解する作業を避けているとも言える。これは近年の知識偏重と指摘されている受験勉強の弊害ではないかとさえ思える。

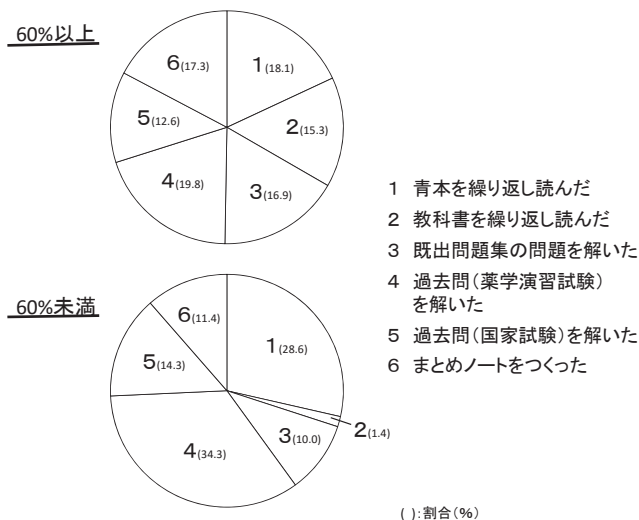


図4 勉強方法

5 分からない問題への対応

勉強するときの人数は、両グループとも同様であった（図5）。強いて挙げるなら、60%以上のグループの中には大人数（5、6人）で取り組んでいる集団が2.5%いた。

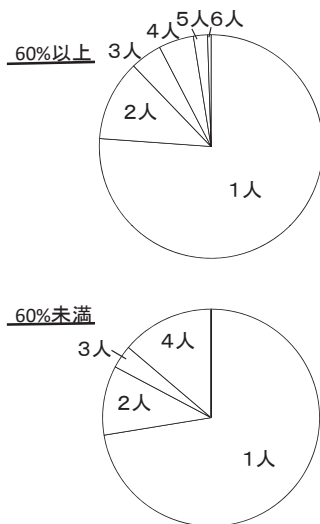


図5 勉強するときの人数

分からない問題への対応では、60%以上のグループでは、「友人に質問」、「担当教員に質問」、「ネットでの検索」をバランス良く利用しているのに対し、60%未満のグループは「ネット検索」に大きく依存していた。聞きやすい友人へは質問するが、質問しにくい教員のところへは行かない行動が見て取れる（図6）。この傾向は勉強以外の相談をするときにも反映されていた（図7）。頼らないという姿勢は意味があるが、たった一人で奮闘するよりは、多様な人的リソースをうまく使うことの方が大切と思われる。けっして孤独な戦いを続けてはならないということだろう。

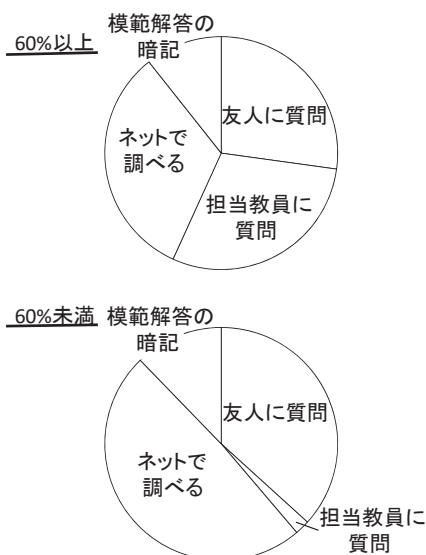


図6 分からない問題への対応

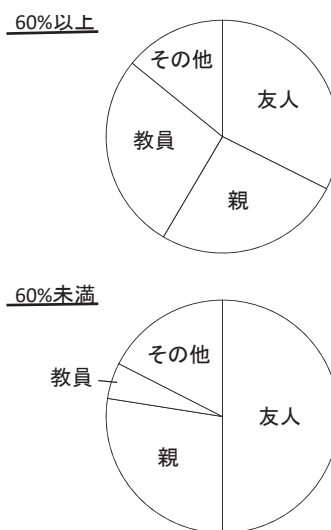


図7 勉強以外のことでの相談相手

時代を反映してか、ネットを利用することが多くなっている。ネット情報は教科書などの情報に比べ、断片的な知識の獲得に長けている。例えば、言葉の意味や公式の検索ではとても強力なツールである。しかし、体系的に知識を取得するには不向きである。英単語を調べるときの電子辞書と冊子体の辞書の違いでよく議論されることに似ている。断片的情報を体系付けて伝える役を担えるのが教員である。教員とのアクセスを避けて「ネット検索」に偏った学習を行うことで、断片化した知識を体系化できずにいたのではないだろうか。断片化情報の取り扱いには単なる暗記になりかねず、12.5%が模範解答の暗記に頼っていたことと考え合わせると、これは大変憂慮すべき事態である。今後、このような学生が増加していくことが危惧されることから、早急な対応が必要であると考える。

IV. 今後の課題

今回のアンケート結果より、学生に勉強する習慣をつけさせること、孤独な戦いを避け、多くの人的リソース、特に教員と交わることを低学年（特に入学してきた1年生）にガイダンスなどで伝えて奨励することが大切と思われる。毎年4月に予定されているガイダンスで伝え続けていくなどの活動を通して定着させたい。さらに教員に積極的に質問できる雰囲気をつくるために、来年度図書館脇に新設される学修支援のためのスペースで実践していきたい。また、生活面・勉強方法などのアドバイスを求める先として教員が有用であることを理解してもらい、欠いたバランスを修正していくことを働きかけたい。そのような活動も、私達学修支援部門の果たせる役割の一つであると考えている。

今回の結果は、単年度のアンケート集計より得られたものである。継続して行うことで本学特有の問題点を発掘し、その対応を行っていきたい。

参考文献

宮本雅之, 問題解決学習と系統学習の対立の解決に向けて, 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 53, 1-13 (1997)

小川洋, 学習支援センターの研究: 学生の学び支援の新たな試み, リメディアル教育研究, 4, 58-62 (2009)

中島英博、中井俊樹, 優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト, 大学教育研究ジャーナル, 2, 71-80 (2005)